

日本書紀傳 二十卷 上

和書
一〇五二二號

平

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (69)
函號	特 85 1

和書一〇五二二號



教
子
三
印
省

高
野
書
庫
印

一第

日本書紀傳二十之卷

内一三六八三號

神代上第十八

寶鏡開始章

總積重僧

謹撰

一書曰是後稚日女尊坐于

齋服殿而織神之御服也素

妾鳴尊見之則逆剥斑駒投

入之殿内稚日女尊乃敬馬而

○日本書紀傳二十

〇一

オチテ 父ヨリモ モテ モ タル ビ ソコニ ミナテ カム サカリ
隨機以所持梭傷體而神退

テレキロ
矣

此一書ハ神御衣の事と日御像の事と二の異説を書
して他事を交へざる者あり其神御衣の較略ハ正書
小又見_下回天照太神方織神衣居齋殿則剥天斑駒穿
殿甍而投納是時天照太神驚動以梭傷身_下略と見元第
二、一書おも旦日神居織殿時則生剥斑駒納其殿内と
有て右の二の傳共小天照太神の御自神御衣を織る

せさせ給へる趣ふれども古事記小ハ天照太御神坐
忌服屋而令織神御衣之時穿其服屋之頂逆剥天斑馬
而所墮入時天衣織女見驚而於梭衝陰上而死と有と
此とハ同ト傳ふて唯稚日女尊と天衣織女と御名の
異あるのと然るハ稚日女尊と申すハ本より_ハの御名
ある_ハ天衣織女とハ其職掌を以て云称小て農作_{ナリ}
の人を指て由人_{タビト}と云むが如し又此小神退矣と有ハ
見驚りして其服屋を逃避り給へる事あるを其をも
罷こ云るある小古事記ハ死をも麻加流と云り思
違へて其神退也_矣小常て死字ハ書る者小て彼伊弉諾_{イハ}

尊の神避り幸行し御事を崩御坐しと僻心得せると
全同し類ある者あり古語拾遺石窟段小全天柵機姫
神織神衣所謂和衣古語と有八全此神同功の神御在し坐
す事己小傳十九七丁小粗云るが如し己己先立て身
死給へる神ありむ小此小至りて出させ給ふ可く
も非りける者あるをや神代の傳ハ傳あがり小して
外國説の稍小世小盛小成小以て行く頃をひかりけり程ハ
伊勢丹尊の御事二保食神の御上三此小稚日女尊
の御事ふど是あり斯る止事無き大神等の御上小其
死坐る由を云ハ悉く小古傳の違へ○是後ハ正書小
る小非小して記者の誤ある者あり○是後ハ正書小
是後素戔嗚尊之所行也甚無狀云云と有を略きて書

れたる小て此ハ其同ト續きの文中ある事の異説あ
るを示されたる者あり○稚日女尊先小ハ栲幡千
二姫命同神たる可く思ひし○ども古事記小ハ天衣
織女と有る其ハ一神の名小ハ非ず其事小仕奉れる
部を云ると聞えたり諸傳十九七丁小引る機殿儀式
帳小天八千二姫殖桑葉於天香山以所盤之御糸織供
進御衣於太神と有る天八千二姫ハ右の栲幡千二姫
命あり事論無しと雖も其神の亦名を天柵機姫神と
申す小對へて別小弟柵機姫神と申す一神も有と聞
ゆるが其弟柵機神と此稚日女尊とハ同ト神小渡り

せ給ひて其ハ三女神を申奉れる如く所思ゆる由有
り然るハ駿河風土記小安辨郡思津機山志豆機神社
日本武尊東征之時遭野火屯此山避其勞阮時尊深志
專思倭姬命之神教神教見依此以栲幡子ニ姫祭此山
合之天照太神有深理潛心宜辨之志豆機
号之之名者本女功依兩神名與其功業而
也号之と有る栲幡子ニ姫命ハ天照太神の御戸開神ハ
坐セバ齋奉るせ給ひ稚日女尊將其神を力を合せ給
へる織女神ハ御在し坐し又武事を祐護るせ給ふ神
小渡るせ給へる故を以て合祭るれし亦る可し傳三神小引其景
行天皇四十三年御紀其勞阮の所ハ王曰殆被欺則悉焚

今又五葉行に據
以る云是出駿河
奈流阿倍子市道
亦相之見事羽裳
と有る阿倍市名
アリ然る時傳五
言小社せり事姐
神の御りをし
是合事也

其賊衆而滅之故號其處曰燒津見元たるを神名式
小同國益頭郡燒津神社有る風土記ハ所祭市村島比
吟也ハ此神を栲幡子ニ姫命ハ合七祭れ
りけむを其女功ハ本づける御の名の稚日女尊と申す方を此ハ
齋祀れる由あり又同式安倍郡大歳御祖神社を風土
記ハ大歳御祖神者號玉依姫と有る志豆機神社共
小府中小御在し坐をし思合す可し但風土記ハ或雷
角見命之女也と云るハ誤あり思ふハ此ハ大歳神と
賀茂御祖神とを合せ祭りて一神の如く傳へたる社
号ハ右の志豆機神社ハ式ハ載られしと雖も風土記
卷五十七丁ハ云るガ如ク三女神を合せて申す御名
あり右の志豆機神社ハ式ハ載られしと雖も風土記
小思津機山或志豆機山或賤波多山又号青葉園有る山

上憶良短歌薦河路乃青葉罔尔身波須禮_持止袖波千
志恩尔成茂古曾須礼_と見元八雲御抄_の志豆機山
駿河_の記_さ又傳十五_{三百二}小引る清和天皇實録負
せ給へり_と觀十三年宗像大神告文小我皇大神波樹毛畏岐大帶
日姬乃彼新羅人_子降伏賜時_ふ相共_{加力}倍賜天我
朝_子救賜_比崇賜_{奈利}云云_の有を紀記共小更小所見無
き事_と先小ハ思ひ_し右の事を訂正し得て考
る小神功皇后御紀ある御誨ハ一_小撞賢木巖之御魂
天疎白津媛命_小て天照太神の荒魂あり二_小稚_此日女
尊_{あり}三_小事代主_命四_小住吉三神_{あり}各其住坐
る處を_しも宣ひける小稚日女尊事代主神のハ一_小

連ねて答曰幡菰穗出吾也於尾田吾田節之淡郡所居
之有也_と宣へるを淡郡ハ釋紀小己小神名帳曰阿波
國阿波郡建布都神社事代主神社_の有を引て証され
たるが猶稚日女尊の神社考不可_らざるあり然る
小同式名方郡天石門別八倉比賣神社_{大月次}の有る
其ハ傳十九_{四百九}十一_丁小徴_一註せ_るが如く謂ゆる御戸
開神_小て拵幡千二姫命_小渡_るせ給ひ其本社ハ伊
勢國多氣郡佐那神社二座_の有_るより移_し奉れり_の所
見て今も佐那河内村_の云小御在_し坐_る是_{あり}其小
並_びて天石門別豐玉比賣神社見元たる其ハ此第二

一書小玉作部遠祖豐玉者造玉と有る同名あり有け
れバ同神ある小ころと思ひしつども第三の書小玉
作遠祖伊弉諾尊兒天明玉と有て其子孫小玉作連有
此バ男神あるもて猿女君の如く職以て継小非れバ
豐玉比賣とハ申す可き小非ず然れバ傳十五百九十
六丁
より始て條二小云るが如く彼三女神を合せて玉依
姫命と申し又由良比咩神と申せらる其玉より成
坐一所由小依れら御名ふれば豐玉比賣神とも称奉
れりけし然れ心右引る神功皇后御紀の上文を兼て下小
亦稚日女尊誨之曰吾欲居活田長峽國因以海上五十

狭茅令祭亦事代主尊誨之曰祠吾于御心長田國則葉
山媛之弟長媛令祭と有る稚日女尊ハ即右の天石門
別豐玉比賣神とて克合へり即神名式小攝津國八部
郡生田神社名神大月次と有る是あり又山城國葛野
郡天津石門別稚姫神社名神大と有る此を以て稚日
女ハ稚姫と唱奉る可き御事を知り又天石門別とも
天津石門別とも冠ふるせ奉る所由をも知べき者ふ
り此三神を磐戸隱の時小御功御在坐御事物ハ所
見ざれども女功の事ハ就てハ栲幡千千姫命と相並
び御在一坐御功を立せ趣ハ此御戸開の御

事あり相交り給へるあり可し彼大倭国者以行夏
 負名國也と有る條理を立て明らめ奉り可き御事な
 り俣此稚日女尊を其三女神と見奉り上ハ右に擧た
 る宗像大神告文の事も曉り得て知る可き事あり
 うし但其大神ハ筑前国宗像郡ある本社よりこり御
 御在坐る御霊の出せ給ふ可き御事あり阿波國よ
 一應ハ思ふ事あれども其事代主神も神代より鎮り
 御在坐る止事無き御社幾干も有ぬ可き事あり阿
 波國より出せ給へるふど神の御上ハ然る可き
 深き所以有る御事あり有べし御傳六卷百十
 八丁十四卷百三十七丁に云るが如く彼國ハ一豊
 受大神の御生坐る御本生の地あり有けられ彼三神
 の其國よ御在坐り持齋りせ御在坐る御霊を
 も豊玉比賣神と申奉りけし其よ並べ和多都美
 豊玉比賣神社有と以て豊玉ハ玉作の謂は非る事を

明らむ可然れば此の齋服殿の御事を正書小天照太
 き者あり然れば此の齋服殿の御事を正書小天照太
 神々云ハ其織女の神等の別小在を漏せらあり第二
 一書小日神居織殿と有る御自織せ給ふ御事とも聞
 えざれば別小織奉る神有る見ても宜らる可きむ
 を此小稚日女尊と有ハ甚愛たくハ有れども此小ハ
 栲幡千二姫命を漏せらあり又上小引る機殿儀式帳
 小天八千二姫命の御名有る其小ハ稚日女尊を脱せ
 るあり又古語拾遺石窟段小令天棚機姫神織神衣と
 有ハ弟棚機姫神の御名を略けら者小て如此く同
 功の神の両神相並び坐る小ハ傍の一神の御名を擧

傳ふ事或ハ高皇產靈尊とも皇^神產靈尊とも傍の一
 柱を以て記されたる小同じ例あり然れば古事記小
 天衣織女と有るハ彼此を別たざる記し様めて甚愛
 たり借其三女神を^{合せて}玉依姫命と申奉る擬^たひ^は稚^姫
 女尊と申奉れるハ拾遺は是以天照大神前吾勝尊持
 甚鐘愛常懷腋下称曰腋子^{今俗号稚子謂之和と有が如}
 可古是其轉語也
 く此時は生坐る男御子と^{ワカ}稚子と称奉る給ひ
 けひ其は對して其女御子と^{ワカ}稚姫とハ称せけ
 る事の有つらむを其ハ漏て傳へぬよて有けり
 然れば私記は稚日女尊私記曰向は何神哉答當是

合して口訣小稚日女尊
 者伊弉諾尊子兒と
 云ると同日の談あり

天照太神之御子矣と有るハ必兼る所有る傳説小かむ
 有ける但其下小私案先代舊事本紀云此尊者天照太
 神^神之妹也と有るハ其神祇本紀小其稚日女尊者
 天照太神之妹也と有るを取て私案小加へたるハて聞
 推の事ふ可^又生田社記小稚日女尊者之於古書
 實是天照太神也宜哉我遠祖以天照太神爲稚日女尊
 祭之實是古來相傳之秘事也我子孫深秘之勿洩矣と
 有れども稚日女尊ハ右小引る式小天津石門別稚姫
 神と有て日女ハ姫の義小ころ有けれ日靈此云比翼
 吟と有と唱も何れんて借傳十五四百小引る出雲風
 異ふるを知らざる説あり五丁

土記小神門郡八野郡郷郡家正北三里二百一十歩須
 佐能衰命御子八野若日女命坐之尔時所造天下大神
 大穴持命將娶給爲而令造屋給故云八野と有て矢野
 社所見たり神名式の八野神社是あり此八野ハ令造

△播磨國土記
 穴木郡阿和加
 山伊和大神之妹
 阿和加比賣命
 在於此山故曰
 阿和加山
 有阿和加比
 比賣命ハ大若
 比賣命ト申
 事カレテ決
 同神トテ渡
 給カレテ備
 其

屋と有る由（を以て）後小冠申せらるりて本名ハ若日女命
 小一て此小謂ゆ々稚日女尊小御在し坐あり其滑狭
 郷の下（須佐能袁命御子）和加須世理比賣命（有る）同神小渡りて
 給へるを異神の如く傳ハれり小ころ有けれ實ハ一
 神小御在し坐る由己小云るが如し此矢野社小就て
 妙なる説有り伊勢國壹志郡矢野村小祭れる（式外香
 良洲社ト云小舊社有り俗小香良洲御前ト云小社傳
 小加良須媛命天津稚女稚日女尊也ト云ハ右の如き
 三の御名御在し坐とある可し又其祠官今井氏の舊
 記小ハ祭神稚日女尊欽明天皇の御時壹志直青木ト

△大同中大伴文守ハ爲
 小安濃の中尾張の女
 香良媛也此洲小
 剛（三度舞）舞
 大天在洲の上小指置
 後の契を約せし
 香良洲矢野ト云
 名始りたる由云ハ附
 會の説を以て恐ハ

口又五葉集小梓弓春立
 一物部の矢野の神
 山霞棚々ト云

云人小託して攝津國活田長峽國（打摩志）呼流可
 美國須泥（豆）の地小遷り給へり（神名式小謂ゆ々復氏神社是あり）と有て矢野の地小稚日
 女尊の御在し坐る事右の八野若日女命小合ひ又三
 女神ハ天照太神小素戔嗚尊小御女（由右の）
 私記風土記共小打合る小心を潜めて思不可き者お
 りり（又）加良須（ハ）韓（カラス）紡（フ）小て彼征韓の御事を保祐奉
 りせ給ふ由其同じ時小顯れ給へる廣田大神の別社
 西宮を夷神トモ荒夷神ト申奉る小意味相似（事あり）たり
 可一萬葉（十四）丁小妻隱天野神山露霜尔ニ寶比始散
 卷惜と有ハ何れの國あるう知ざれども天野神山と

河波國名方部

備至勝間櫻落葉卷
小伊勢國の志郡小
辛洲社云有り古
社ハ見少此知何
多神小御在すハ詳
ふす俗ハ天照太御
神の御妹ニ坐マ申
あり近マ項神別本
紀ニ号けたる物也
天照太神の御妹守良
須命云有ハ彼俗
説小依て造出たる
り云と云れたハ然
事ハ社傳の古
説も漫り小捨て
小ハ非あり但其
取て右の安書小
る事共ハ凡て云
足ぬ僻事の云り

云りハ其ハ此神小由有る山冠辞考小
ハ和名抄郷名小播磨國赤穂郡ハ野備後國甲奴郡矢
野伊豫國喜多郡矢野夫野有り是將何處を詠げむ
知るれ後世の國分名所抄ハ伊豫と記したれど
例の覺束無しと有り又右小舉たる天石門別豊玉比
賣神社を一説小矢野村小神名式小攝津國八部郡生
在云り土人小正す可し御名攝津國八部郡生
田神社名神大月次和名抄小生田以久有る是あり
三代實録小貞觀元年正月廿七日甲申奉授攝津國正
五位上勳八等生田神從四位下同十年十二月十六日
授攝津國從四位下勳八等生田神從三位同十年閏十
二月十日己亥遣使於攝津國廣田生田神社奉幣告文
曰略攝津國解良地震乃後尔小震不止因卜求之年大
礼波

神乃布志己利賜天所致賜奈利申利又先日禱申賜布
事毛有利因今從一位乃御冠尔上奉利云云と見え
り社傳ハ八種日女尊を天照太神と同体と爲るハ其
攝社小五男三女神を祀祭れバ然ハ有ぬ可き事ハ
がる本社ハ三女神を合せて種日女尊ハ申す御名
を以て祭り別社ハ其三女神の御名を別て祭れる
者と所見たり今此を聞く小攝社本殿の側四座住吉八幡日吉
諏訪の四社あり別社ハ所一御前田心姫命北野村小
坐す二宮天忍穗耳尊菟原郡生田村小在り三宮湍津
姫命神戸村小在り四宮市村島姫命花熊村小在り五

宮天穗日命手野村不在六宮天津彦根命坂本村不在
 在り七宮活津彦根命兵庫津北濱町不在八宮熊野
 神社宇治野村坐とも一坂本村坐とも云る社
 傳あり諸此生田神社の稚日女尊を一も三女神と見
 奉る時八長田神社坐事代主命ハ御母子の御
 中間御在一坐ハ申すも更あり彼天照太神の奉
 助天孫と詔給へるハも相叶ひ又上引る清和天皇
 實録小宗像大神の彼征韓の御政を助奉るせ給へる
 小合ひ旦神名式ハ山城國葛野郡天津石門別稚姫
 神社名神大月次新嘗同録小貞觀七年六月廿二日 授山

皇國の使小神酒給
 小事の條

城國從五位上天津石門別稚姫神列官社ト有る此社
 を或説ハ今雲島村辨財天子ト云る其も傳十五卷小
 云るが如く諸國ハて此宗像大神を其辨財天トて
 祀れり例ハも相叶へれば愈大ハ勤くやハき故由の
 有けりハ思合せて心を定む可き者ありハ玉勝間
 卷ハ舒明天皇御卷ハ四年唐國使人高表仁等ハ難
 波津云ハ即日給神酒ハ玄蕃寮式ハハ新羅客入朝者
 給神酒ハ有て其神酒の事ハ其釀酒料稻大和國賀茂
 意ハ富經向倭文ハ社河内國恩智ハ一社和泉國安那志社
 一社攝津國住道伊佐具ハ二社各州ハ合二百四ハ束送
 往道社大和國片岡ハ一社攝津國廣田生田長田ハ三社各
 五十束合二百束送生田ハ社並令神部造差中臣一人ハ充
 給酒使釀生田酒者於放賣崎給之釀住道社酒者於
 難波館給之見元ハ於此神酒を蕃客ハ給不事思
 不ハ神功皇后の御世の故由有る事ハ可しと見ゆ

日本書紀傳二十

〇十一

斯る御事の御在し坐小就ても稚日女偕此時の御事
尊を三女神と見奉る時ハ實小叶へり偕此時の御事
ハ右小註る如く栲幡千二姫命稚日女尊二柱神天衣
織女として仕奉らせ給ひけむを此後天石窟隱の御
時小し右の二柱神天棚機姫神弟棚機姫神と仕奉り
せ給ひけり然るハ傳十九三百十引る古語拾遺
小令天棚機姫神織神衣所謂和衣古語尔有を太神
宮諸雜例集小載る神服公等が解狀小掛畏天照生皇太神
御坐天原之時以神服等遠祖天御杵命為司以八千二
姫為織女奉織と有る此を合せて天棚機姫神と栲幡
千二姫命とハ同神小渡らせ給へる事著明然る小

今万葉一巻九丁
小倉山古位栲
と栲を多那小借た

其所しても稚日女尊即弟棚機姫神として同ト事小
仕奉らせ給ひけむと思ふ由有て次小云るが如し神
名式小尾張國山田郡多奈波太神社本國神名帳小正
四位下多奈波太天神と有る此ハ打仕せたる方ふれハ右の天棚機姫神小
御在し坐す可し同丹波郡生田神社本國神名帳小從
三位生田天神と有て此而社同國小立せさせ給へる
し由有げある御事小あひ有ける右の本國帳の多奈
波太を一小栲播と
作を天馬信景が参考本國神名帳集説小在山田莊
田幡村云に按栲字誤字と云り名義抄小栲を那多
又那宜志と有れども垂仁天皇二十三年御紀の天湯
河板舉を姓氏録小天湯河栲命と作れハ栲を多那小
用ひて誤ありざるあり又生田神社ハ上小舉たる攝
津國の御社の別社あり可し集説小今在井上莊芝原

ハのシ登ハ釋ハ少女也
ハ見元多奈婆多ハ
釋ハ

村と若て又傳十九三百十小擧たる天孫降臨章第一
一書小下照媛欲令衆人知映丘谷者是味矩高彦根神
故歌之曰阿妹奈屢夜也登多奈婆多迺行奈饑勢屢多
磨迺素磨屢迺阿奈陀磨波夜略と有る此歌古事記
小見所見たるが初句ハ釋ハ在天也と註せり二句ハ
弟織女オハバ之ハ有る借其七登ハ長女小對へたる稱して其
第六一書小大山祇神之女等アヲ大號般長姫少號木花ハ之
耶姫又海宮遊行章ハ海神女豐玉姫と有る其小對ひ
て其女弟玉依姫と書し神武天皇御紀ハ其玉依姫
正海童之少女也と見元たる右等ハ姉妹の間ハ云ハ

弟ふるが此ハ天棚機小對へて弟棚機としも申すハ
具組織の事小就て云ふ弟のて此ハ應神天皇三十九
年御紀小工女兄媛弟媛雄略天皇十四年御紀小縫女
兄媛弟媛ふと有る類是あり此を以て天棚機姫神の
外小別ハ弟棚機姫神と云ふ一神有る事をあむ曉る
可りりける然れば此ハ本より別なる神ハ渡りて
千二姫命をハ打任せて天棚機姫神と就てハ栲幡
申奉る小並坐る御名あり事決き者あり故右の歌ハ
一ハ天稚彦が喪小集へる神等小其稚彦小容貌の似
とせ御在し坐す神ハ下照媛命の兄味矩高彦根神ハ
渡りて給ふ由を明し給ハむとて歌ハれたる者ふる

が當昔の歌小事を巧みて其實小關係る故事おど
を取出て一首小仕立る如き事ハ且て爲ざりつる事
おれバ彼天棚機姫神を云ふハ非ず其て登多奈婆多
と詠れし傳十五二百十七丁小引る地神本紀小大已貴
神先娶坐宗像奥津島神田心姫命生一男一女兒味根
高彦根神妹下照姫命と有が如く其二神の御祖宗像
大神の御祖事を玉依姫命の御事を先歌ひ出られた
りけるりて即上小謂ゆる稚日女尊おあむ渡るせ給
へりける然れば右の歌ハ御母玉依姫命の御頭嬰と
せ給へる玉之御紵と云ふ可美玉有り其御紵の穴玉

映こ云を序しして其玉の映るが如く無して二丘二谷を渡
るすバ我兄味根高彦根神おるらと云事を傍小令知
たる者ありり右の第棚機姫神の御名を頭ハせる
ハ其兄の出自を明さひての事りて天より降れる
神等の見聞知ざられば其御母の事り歌ひ頭ハせ
りし者とあむ所見たりける備上三百三十二丁小註るが如
く此神を織幡神と申奉る事ハ更ふり又肥前風土記
小基肆郡姫社郷此郷之中有川名曰山道川其源出郡
北山南流而會御井大川昔者此川之西有荒神行路之
人多被殺害半凌半殺于時ト求崇由兆云令筑前国宗

像郡珂是古祭吾社若合願者不起荒心覓珂是古令祭
神社珂是古即捧幡祈禱云誠有驗吾祀者此幡隨風飛
行墮願吾之神邊使即舉幡隨風放于時其幡飛往墮於
御原郡之社更還飛來落此山道川邊之田村珂是古自
知神之在家其夜夢見臥機謂久都絡菜謂多利儻遊出來
壓驚珂是古於是亦織女神即立社祭之自尔已降行路
之人不被殺害因曰姬社今以為鄉名と有る織女ハ和
名抄小太奈八太豆女と訓る字ありて己小傳十九三百
丁み云るが如し若て其織女神の事ハ就て思合せし
るニ事ハ傳十七八十小云るが如く宗像の中津島小

天川と云有て中津宮の邊小流大々を其所小七夕宮
有ゆ由己小中古の物ハ所見た々事ハれば宗像大神
をしも正しく織女神と云るありけり右等小云る事
共を如此く漏さずして究め以て行く時ハ其下照媛
の歌小阿妹奈屢夜て登多奈婆多迺と訓れしハ御祖
玉依姫命の御事ハして即栲幡千二姫命の天棚機姫
神小相對へる御名ふちむ御在し坐けり故此天棚機
姫神小天津石門別稚姫神とし申奉る御名御在し坐
て其御戸開神栲幡千二姫命ハ相並バ給へる御功
の御在し坐るを古より以降人皆得知ざりけり事ハ

命傳于二卷三言平
二丁小云多を見べし

を其大神の我心を開きて如此あひ思得しめ給へ
る甚可畏く辱き御賜物ハ有ける但此三女神の天
間ハ甚幼稚く御在し坐けむう其御事ハ係列ハセ
給ふ可くも非ト思ふる香山人も有あめども己ハ
此時の石疑ハ命ハ赤名を天香山命と申して饒速日
命の子ハバ天忍徳耳尊ハ御孫ハ當り天照太神
素戔嗚尊の御為ハ越後國蒲原郡伊夜比古神社名神大
己ハ神孫ハ越後國蒲原郡伊夜比古神社名神大
子ハ有孫ハ越後國蒲原郡伊夜比古神社名神大
るを此場ハ會合ハ御在し坐て鏡を作り刀を作給へ
るハ非すや然れバ此三女神の如きハ二大神の御子
給ひて空しく御在し坐つ可き又上ハ云る如く稚日
女尊を此三女神と見奉る時ハ少の感ハしき節有
る事無くして克合るを又外ハ少の感ハしき節有
名さへ御在し坐ふる小稚日女尊の推ハしき節有
の弟と又相通不義の言ふるおと奇異しきおで合り

○坐于齊服殿ハ正書小居齊服殿と有小同ノ第ニ一
書ハハ居織殿と所見たり即傳十九八丁小註せりき
古事記高津宮殿ハハ爾天皇直幸云云坐其殿戸之闕
上於是女鳥王坐機而織服と云事見元又常陸風土記
久慈郡の下小珠賣美万命自天降時為織御服從而降
之神略造立機殿初織之略おど云事も見元たり○神
之御服ハ正書ニ神衣古事記ニ神脚衣と有ハ如ク神
字ハ神集神議ふと神あると此ノ神之と有ハ天照太
神之御服又ハ日神之御服とも記さる可きと上と略
りれつる者あり傳十九七十神衣の下引る機殿儀

式帳よ天八千、姫殖桑葉於天香山以所蠶之御系織供
進却衣於太神と有ふと例して其然る所以と曉る
可し然れば此ハ稚女尊齋服殿ハ御在り坐て天照
大神の御服を織り給ふ時と云事よて別ハ此
處ハ神の臨幸あり○逆刺班駒ハ傳十九八十
三丁刺天班
駒の下よ云り○殿内ハ其機屋の内と云あり古事記
黄泉国段よ還入其殿内と有と其傳よ登能奴知と訓
れたると後して訓べし其白檮原宮段よ作大殿於其
殿内作押機云り作殿其内張押機と云事も見え大殿
祭詞別よハ皇御孫命乃同殿能
裏ハ塞坐氏とも有て
此と約むれば登能奴知とハ必云つ可き事あり

本小ハ羨阿良加能宇知尔と訓たり其ハ天孫降臨章
第二一書小准尔ニ神同侍殿内善爲防護と有ハ然
訓たれども其ハ御在所の義を以て云所あり此ハ
唯齋服殿と上小有より兼たれ所ふれば然ハ訓ハ難
り○投入ハ正書小穿殿費而投納と有り傳十九八十
三丁
小云り万葉八三十
三丁小多夫手二毛投越都信伎十三三十
三丁
丁小投左乃遠離居而又三十
四丁公之佩具之投箭之所思
十九十四丁小投天毛知子尋射和多之ふどの投是あり
其ハ傳十百七十小己小註り名義抄ハ投字を那具
とも伊多流とし字都
す小事の粗き状あるを那宜伊礼と云り○稚日女尊
乃敬馬正書ハ正書小ハ天照太神驚動と有り古事記小ハ天
照太御神坐忌服屋而令織神御衣云二と見えたる如

高機ハ其織給ヘル
高機の上より轉給
へりて御衣を織て
御立一坐つる種是
專の御事なり

く皇太神ハ齋服殿ハ出させ御在り坐つれば天衣織
女と共に小驚ろりせ給ふなりきふハ非れども猶御身
を傷ハせ給へるを皇太神の御事と爲るハ正書の誤
あり古事記ハ天衣織女見驚而於梭衝陰上有ハ此
傳の趣ハ同くして正實ハ合天衣織女と云ハ此
衣を織奉る部一神の名ふるまじき由已ハ御
上ハ云り但梭以て傷き給へるハ稚日女尊あり○所
持ハ上章第二一書ハ汝所持云ニ見元たる共ハ母
多流と訓り万葉ニ二十小敵見有又指擧有ふと云ハ
並べて取持流る波受乃驟と有り又七十六ハ大夫乃
手ニ卷持在ふと多在り皆母知ハ阿流あるを其意の

急ふる爲ハ切れりあり○傷體ハ正書ハ傷身と有ハ
同ト借此ハ唯ハ御身を傷ハせ給ひて其機屋を逃放
るせ給へる趣ふるを古事記ハ於梭衝陰上而死訓
上云富登云有ハ其事の委し狀ハ有れども信難事
あり通證ハも宗神天皇十年御紀ハ矣倭迹ニ姫命仰
見而悔之急居則箸撞陰而薨と有る文を引て與古事
記意同蓋戒訓之古語也と云れども古史第四十二段
徴ハ於梭衝陰上と云るハ倭迹ニ姫命の故事を紛
したる傳ふる可く思ハれて信難事を神代紀ふる
傳ハ事實ハ叶ひて正しく聞ゆと云れたる如く其所

持々校小觸て何處ハ御身の内ハ傷ハせ給ヒけむ事
の有一を其著の事より實ハ混れつゝむ其上の校
當れるあるむハ御脇の方ハとろハ當る可りけ
れ御陰上ハ殊更ハ撞つずしてハ過ちてハ傷ふずじ
き所ありや ○神退矣ハ唯ハ其所を避て異處ハ移るを
云て四神出生章第三一書小伊弉冉尊の御事を神退
矣亦云神避矣と有し此ハ同じき由己ハ傳九六十ハ
註るガ如し然るも御紀ハ其を崩御り御在ハ狀ハ
誤記されたるハ更あり古事記の此あるをハ衝陰上
而死と書るふハ右の神退又ハ神避てふ古言を
し生死の死の事と僻心得しつる誤ハれば甚く古傳

の意ハ背ける者あり其第十一一書小保食神を實
己死矣と云るふハ其ハ古傳ハ罷又ハ退字の意あり
麻加理と云つつるむを後別ハ死の言を麻加流とし云小
就て字の當損ハれたる中世の杜撰ある者ハして此
等の故事共ハ死を云ハ言ハ断たる曲事あるるハりハ
凡て幽顯の未別れざり以前の事ハ死を云ハ悉ハ
人世の事を押及し云る者ハ上古の意ハ非ハるハ
り但人の退き避る事ハ身死る事ハ相通ハハ云事
常ハ命の所ハ死ハ相同ト又此の神退を天孫本紀
饒速日命の所ハ取て倭姫命世記ハ責人の薨給へ
葬丹尊の石隱を取て俣命世記ハ責人の薨給へ
るを石隱と云ふ趣ハ借神退又神避の神ハ神集神議ハ
あるハ是あり借神退又神避の神ハ神集神議ハ
どの神ハ其言ハ退と避とのハあり故其退ハ去字

此第三書小吾難婦
 女何當避乎三月八
 佐和訓む所おれハ
 佐加流と等一ぎを

の如く避^{サカ}ハ去^{サリ}離^カの重語ある者あり然れハ退をも避
 をも互に通ハ一訓て違へるお非る可一故天孫降臨
 章第一一書小汝意何如當須避云ニ我父宜當奉避云
 ニ故吾亦當避云ニ今我奉避誰復敢有不順者と見え
 又出雲神賀詞小火八島國現事顯事令事避 支と有あ
 どハ佐流と訓べき所あり借佐加流を去^{サカ}離^カありと云
 ハ傳十^{二百四}十五丁^{十四}百十^五丁^五おも云るが今昔物語廿四^二
 段^十の年頃住ける妻を去^{サリ}離^カけりと云るハ更あり古今
 集詞^書小も男女の相離るニ事お加禮賀礼お成ると云
 ひ歌お暮るも明くと目離れ^ぬ物を梅花何時の人間小

移ろひぬるもと有も朝夕小目を放こず守り居る事
 を云るおれば去^{サリ}離^カの離お同ト事あり
 礼述具と訓るハ散去を尙良和奴と訓むお散^七を尙賀
 古の物語書おどお賀礼又ハ尙賀流ニおど云るハ
 彼離^ハ又^ハ彼所^ガ離^ハの意あり又別を和賀礼和加流ニと
 云ハ我離^ハ我所^ガ離^ハおて自爲ると人の爲るとの差有る
 の^ハ某^ハ加^ハ礼^ハと云語の多る皆其意等^ハる可き者あ
 り

故天照太神謂妻亦妾鳴尊曰
 汝猶有黑心不欲與汝相見

日本書紀傳二十

〇三十

スナハチイリマシアメノイハヤニテ 乃入于天石窟而閑著般戸イハトヲ
キヨコニ 焉於是天下恒闇無復晝夜ヨルヒル
ノ 之殊故會八十萬神於天高アメノタケ
チニテ 市而問之時有高皇產靈之ミコト
ミユ 息思兼神云者有思慮之智サトツ

スナハチオモヒテ 乃思而白曰宜圖造彼神之カノカミ
ミカタラテ 象而奉招禱也マツレキ

上件ハ素戔嗚尊の御荒びの段ふる中ハ僅ハ齋服殿
 の較略カあり此ハ般戸隱の御時の事ふるが唯彼日御
 像の御鏡又日矛を造奉る一條有るのこハ一死此一書
 の惣てハ右の二事の日本説あり有ければ全体の文
 ハ正書ハ委任たるが故ハ此始ハ是後云ニと云て正
 書の趣ハ相異ざる者あり所以ハ此の文章の續

け様おとし右の二條を本説と立て餘事お抱ハる事
無く唯其事實不能相應へて文を成せりのこめて此
を以て上下相貫くハ非る者あり然れハ其全体ハ
正書の略とも云つ可き狀あるふ又中ハ奇しく
正書ハ一書ハ泥まぎして獨立たる事おむ有け
る其ハ八十萬神の神集ハれし所を此ハ天高市と云
ひ又故會八十萬神於天高市而問之と見元たる文法
ヲ誰ハ此ハ長と有る神の御在し坐て八十萬神を召
集へたる趣あり又問之と云も八十萬神をして神問
しハ令問給へる狀おれハ此を以て其八十萬神の上

お立せ給へる神の御在し坐る事おむ灼然りけり
を下小時有高皇產靈之息思兼神云者と有ハ思兼神
を擧て出させ御在し坐る趣ある事ハ亦灼然りけ
り故古語拾遺ハ高皇產靈神會八十萬神於天八湍河
原議奉謝之方と有ハ捨難き傳ある事此ハ合せて知
るるめり傳十九百四十五ハ註せり事共考合す可し
小書紀の傳共ハ皆同じき中ハ唯一書ハ會八十萬神
於天高市問之と有ハ他神の命おて集ハせたる書様
おれハ都度開氏と訓べし然れども彼處ハ何神之
命以と云事ハ見えず推當ハ書ハる可しと云れつ
れども下ハ有ハ高皇產靈之息思兼神云者と云る能
見多ハ其八十萬神を會へて神問し給へる上右ハ置
神ハ高皇產靈神を以て殊ハ令思給へりと思兼神
せ給へりし思兼神をして殊ハ令思給へりと思兼神

ハ何神の命と云ずても
其義甘く聞ゆる者あり○汝猶有黒心ハ瑞珠盟約章
小素彥鳴尊の上の坐る事を日神の疑ひ所思て詰
問ハせ給へる所小吾元無黒心と申させ給ひけるを
于時天照太神復問曰若然者將何以明尔之赤心也對
曰請與卿共誓夫誓約之中心當生子如吾所生是女者
則可以爲有濁心若是男者則可以爲有清心と見え
たるが如く其誓約の御間小生坐む男御子女御子を以
て其心の赤きと黒きとを明し申さむと申させ給ひ
ける小元より素彥鳴尊ハ清心小御在坐けれ
バ信小申給へるが如く日神の物根を乞度し給ひて

終小男御子を成し奉らせ給へりき謂ゆる五男神是
なり故其第一一書小故素彥鳴尊既得勝驗於是日神
方知素彥鳴尊固無悪心と見え第三一書小故日神方
知素彥鳴尊元有赤心と見えたるが如く日神の御疑
此小至りて悉小晴させ給へりき傳十九卷の始小
己ハ註るが其後小日神の大御使と爲て保食神の
許小葦原中國小降者着して報命し給ひてより其事小
係列ハせ給ひて殆小天津罪を犯せさせ給へる種ニ
の御所作共甚轉有る御行あり故小先小素彥鳴尊
の吾元無黒心と申給へりし事共を打消たせ御在し

坐る御言ふて正書小天照太神云こ由此發愠と有ハ
當る所あり斯れハ此小汝猶有黒心不欲與汝相見と
む有ける但詔給へるハ即其發愠の御語と云物小出
させ給へる三女神の御事ハ上小註るが如く其時小生出
為ハハ御子小御在し坐れども然る御心も御在し坐
ず唯其保食神の御事小依て甚く神荒び小荒びさせ
給へる ○不欲與汝相見ハ此も瑞珠盟約章小於是素
彥鳴尊請曰吾今奉教將就根國故欲暫向高天原與汝
相見而後永退矣勅許之乃昇詣之於天也と見え其日
神小申給へる御言小も父母已有嚴勅將永就乎根國
如不與汝相見吾何能敢去と有が如く御同胞の御間
小御在し坐せば元より好ハしき御心の御睦を以て

参升らせ御在し坐けるあり其後日宮小留り御在し
坐し程の御事あるが四神出生章第十下一書保食神
の許小大御使と爲て到坐る時小其御郷食奉らせ給へ
る態を見て是時月夜見尊忽然作色曰穢矣鄙矣寧可下以
口吐之物敢養我乎迺拔劔繫殺然後復命具言其事時
天照太神怒甚之曰汝是惡神不須相見乃云ニ隣離而
住と見えたる是時小日神の御前を退させ給へる始
あり此小素彥鳴尊の御心ハ吾ころハ日神の御同
胞ありけれ吾を退けて無禮ヤナりつる保食神を好し
給ひ又其御身より成れる物を甚く悦こばせ御在し

今見元比第三書小
も凡此惡事皆無息
時難然日神不愠但
以平怒相答焉

坐て是物者則頭見蒼生可食而活之也。と詔給ひつと
も食物着物住家の事を遍く世小幸給ふ可く事始め
定めさせ給へるが故小其物ニ小當りて傷損ハせ給
へるあり然る小古事記小故雖然為天照太御神者登
賀米受而告如尿醉而吐散登許曾我那勢之命為如此
又離田之阿埋溝者地矣阿多良斯登許曾我那勢之命
為如此登詔雖直猶其惡態不止而轉有者か如く此
てハ各詔直し給ふ道も御在し坐しりども此齋服殿
の御事小就てハ見直し給ふ可き方ころ御在し坐さ
りけらし是を以て不欲與汝相見と詔給ひ放ちて天

今下平
小引る紀國造
系譜小此紀を引る小
も然あり

石窟小ハ入らせさせ御在し坐けりあり故右小引る
第十一書小汝是惡神不欲相見と有ハ下小一日一
夜隔離而住と見えて唯暫時の御事ふを此ハ御怒
甚しく御在し坐て閉籠りせ給へるふれハ尋常の御
事小御在し坐と詔給へるふも其も次第の有て因
不欲與汝相見と詔給へる人ハ然る心も無く其一句小
就て濟せ置く。○閉著多氏都祁給比伎と訓べし今
俗小戸を闔る事を然云るハ即古言小て右の閉著の
字小合り備此著ハ其石窟の洞穴口ふる所小般戸を
閉塞きたる上小門戸小關鍵を以て刺固むるか如く
して固させ御在し坐て日神の御自開らせ給ふ非
ずハ石戸破る手カ雄神と雖も得放ち開くまじく物

無復書之夜之殊
 有與流比流登伊布
 和伎也訓べ
 傳九百平 小引多世語
 拾遺小六乃六合常闇
 書夜不分日向風王記
 天暗直ハ晝夜不別と
 見一方晝並ハ晝夜
 晝云別不知十二
 小吾戀者夜晝不別
 之有者明覽別常
 不知而自有此ハ別
 和伎と訓い事古言
 ふれハ殊字ヲ然訓
 て克合リ借此ハ天
 下と有

爲させ給へるを云あり然れば著字此ハ要と有る
 所あれハ今本小閑著(別)をバ佐志都と訓るハ叶ハズ
 者と知べし今も京あどの方言小右の多氏都祁小
 固い事事を伎都祁と云ハ限る男女共小衣裳を着て葬束ひ
 著あども右小同じ云恒○天下慎闇ハ正書小故六合
 之内常闇而云ニと見え第三一書小其般石戸の事を則
 引開之者日神之充滿於六合と有て下小諸神噴素多
 鳴尊曰中略故不可往於天上亦不居於葦原中國と有れ
 バ六合ハ天上天下を兼たる林ふる事己小傳十九百
 十一小委しく註るが如し然れば此ハ天上の事を
 脱せらつと云小然らざる其御事小依て國土小てハ晝

夜の相代り行く差別も知れざりし由のを傳へ
 たる者ふる可くして凡て此頭國の事を主と爲る例
 の御紀の文体ある小ころ其ハ正書小右の如く上小
六合之内と有あがり其下
小謂當豐葦原中國必爲長夜と云ひ古語拾遺ハ上小
ハ六合常闇不知晝夜不別と有あがり下ふる日神の
御言ハハ吾幽居天下悉闇と有同日の談ふして凡
てハ此茅三一書又古事記の正しきハ如ざるあり
 ○天高市ハ正書小于時八十萬神會合於天安河邊と
 見え古事記ハ是以八百萬神於天安之河原神集ニ
 而見え拾遺ハ高皇產靈神會八十萬神於天八湍河
 原と有あどを合せ考る小異説ふる小てハ有べし
 ず八百萬神の神集ハ小會ハせ給ふ處即其天安河の

邊傍小在る是を云ふ可し其ハ古事記御天降段小
尔高御産巢日神天照太^御神之命以於天安河之河原神
集八百萬神集而思金神令思而詔^{略下}と有也此^{段の狀}と同一
を遷却崇神詞小神漏伎神漏岐能命以^氏天之高市
尔八百萬神等^予神集二給^比神議二給^氏と見えて其
安河原の事を天之高市と云り其^天高市の高ハ高山高
岡高野高岸ふと云ふ高小其安河邊小在る高岡ふ
る處を云ふり市とハ八百萬神の神集ふ場を云ふり
口訣小天高市天上諸神會合之處と云ひ纂疏小天高
市蓋在天上取諸神集會之義と宣へるハ信小然る説

ありりし然る小神名秘書小天高市者天宮是也と云
在し坐て宮都小ころ有けれ然れども諸神集會の場
ハ右の如く日宮の外小在て謂ゆる天安河の邊ある
事右件の證文共有て甚著明者あるを此ハ事ハ
別あれども崇神天皇七年御紀小於是天皇乃幸テ神
淺茅原而會八十萬神以下問之と有が如く其事と有
る時ハ日神ハ申すも更あり高皇産靈尊神皇産靈尊
の幸行して諸神を神集へさせ^諸又天孫降臨^章章二
給へる場即天高市あり者あり一書小是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合
八十萬神於天高市師以昇天陳其誠款之至^{略下}と有ハ
纂疏小大和國高市郡是也今天高市神社在焉と見元
たる是あり然る小天高市ハ右小云るが如く天上小
在て諸神集會の場あるを此小も其同じ称ふるハ如

何小と云小此ハ大物主神及事代主神二柱ハ國神の
首渠集小御在し坐せハ其歸順ハ奉給ふ誠疑の至を陳
し給ひむハ其正書小如吾防禦者国内諸神必當同
御宗今我奉避誰復敢有不順者と先小申給へる御言し
有れば國土小在と有ゆる其二神の帥給ふ限の諸神
を擧て上りせ給はずてハ得有まりを御事ある故小
其今云ふ高市郡ある所をしも諸神集會の處として
此より天高市其天上ある小上り坐る故事を以て此小も天高市
と云名の遺れらあり神武天皇三十一年御紀小復大
己責大神月之曰玉膳内國と有が如く其大神の宮處

ハ大和國小も有つむを其イデ幸行して諸神を神
集へさせ給へる小てぐ有べき口訣小大和國高市郡
准之と云る如く天上の天高市小准るへたる者あり
和名抄郡名小大和國高市多と有り又神名式小同
郡天高市神社大月次見元古事記朝倉宮段太后御歌
小夜麻登能許能多氣知新嘗尔古陀加流伊知能都加佐と
詠せ給へるも其高市の事小て古陀加流ハ處ユタカル高在の
義伊知能都加佐ハ市之司つて其新嘗屋を造りて給ふ高き處を云あり岸の高き處を岸之司
と云ひ野の高き處を野司ヌツクサと云小同じ此を以て高市
の高の義を得て知べき者あり

右の古陀加流ハ下小
淤斐陀也流波昆呂由

都麻都婆岐と有る其木高き事として聞ゆれども
 猶上より云續けたる状を思ふ小必然す其高市の
 處の高き事を宣へるあり借又和名抄郡名小其高市
 の次小十市止保知と有る高市小對へて遠市と云る
 小や猶考ふ又和名抄郷名小常陸國久慈郡高市有り
 可き事あり
 風土記小所稱高市自此東北二里密筑里村中洋泉謂
 大井夏冷冬温湧流成川夏暑之時遠近郷里酒有齋資
 男女會集体遊宴樂其東南臨海濱石決明棘甲羸西北
 帶山野推櫟榧栗生凡山海珍味不悉記と有る高市郷
 内小密筑里と云地の事を云るふるが此地今ハ多賀
 郡小屬て水木村と云と云り借文小見元たるが如く
 西北小山野を帶て東西小海濱を臨む是即高と稱る

今ふる此武天皇十
 御紀小所見たる輕市の
 事ふる推古天皇
 二十年御紀小已小輕
 衛と云名有り又敏
 達天皇十四年御紀
 の海石市推古の事を其
 万葉

所以あり又遠近の郷里より男女會集体遊飲樂と云
 るハ市と號くる所以是あり此を以ても上小云る天
 上の天高市大和の天高市ふどの義をも思ふ可き者
 あり借市と云ハ右の如く人の集會する處を云語ふ
 るが故あり小万葉二三十小吾妹子也不止出見之輕市小
 吾立聞者玉手次畝火乃山尔喧鳥之音毛不所聞獨俗
 玉梓道行人毛獨谷似之不去と有て人の多く行交ふ
 事を詠ふあり又十二十二小海石榴市之八十衢尔立
 平之と詠あり武烈天皇御紀小海石榴市卷欵推古天
 皇十六年御紀小海石榴市衢と有るが如く市小ハ必し

も衢を云事の定りあるハ人の集會ふ場おれハあり
和訓祭小右の八十衢の歌を引て市ハ五十路イテの義お
る可しと云るハ信不然イテと説あり但阿伎の切め伊小
と有ハ僻事あり市ハ人の集會ふ處ある小就て商も
其小依て有る事おれハ其本未の違有る可し市字ハ
圓機活法小買賞之所也と見えたる字を當たる事お
れども伊知と云言の本義小非ず猶漢籍小ハ易繫
辞小神農氏日中爲帝イテ致天下人聚天下貨交易而退
各得其所と云又代醉編小闡市外門と有る名義抄
小伊知加行又佐和久と有り遂を文選註小市中道と
見えたる小名義抄小伊知能美知又伊知具良又美知
と有り又鄼を周禮註小市中禮註小市中陳物處
伊知具良と訓む字あり又肆を周禮註小市中陳物處
と有る和名抄小唐令云諸市每肆立標題和名伊知久
良と有て店も壘も共小同ト市倉の義あり右等の
如く西戎おて市と云るハ賣買の地あるを以て云を
此の伊知の言ハ然らず人の來集ふ義小起れりあり

○會ハ加牟都度閑尔都度閑氏と訓來れり借此ハ正
書二會小合と有れハ何れの神の命令と云おても無く自
然小神等の神集ひ坐るあり故古事記ハ訓集云都
度比と殊更お註されたり然れども此ハ古語拾遺小
高皇產靈神會八十萬神於天八湍河原議奉謝之方と
見えたる如く猶高皇產靈尊神皇產靈尊二神の大命以
て八百萬千萬神等を神集へ小集へさせ給へる趣お
る事已二十小云るが如し然るハ下小高皇產靈尊
之息兼神云者有思慮之智乃思而自云と見えたる其息と
云事ハ傳の誤おれども上小八十萬神を會へと云ひ

古事記小高御産
業日神之子思兼
神令思と有る如く

又問之と云るハ其神の命令トハシムあり事著明き小思兼神
小ハ乃思而白曰と有ハ其を奉行ウケテツクふ由あり小殊小
其神之息と云るハ其思慮の事ヲ依ヨて親ヲしく召メ纏ムハ
世給ヲ依ヨれり其ハ古事記御天降段ヲ小高御産業
日神天照太御神之命以於天安河之河原神集八百萬
神集而思兼神令思而詔と有る此ハ其章の第一一
書小故天照太神乃召思兼神云思兼神思而告日と
有て令思ヲ思ヲと文の續き依ヨて別ヲある事の如しと
雖も下其命令を受テ行ハ所等ヲし下けれハ云以て行
けハ其同致ヲ小あむ歸ルめら然れば此の思兼神の乃思

の國有
小ハ

而白曰と有る産靈神の命以て思兼神小令思て令白
給へるトある事此の會トへと次の問之と小合せて知べ
き者あり傳十九百四十六丁六丁小引る古史第四十四段徴小
此事實の上より思ふトも天照太御神の幽居して甚
トき禍事の起れるふれば八百萬神等誰集へぬトも
集ヒかりけむ事ハ信小然も有ぬべき事ありト偕然ト已
自ヲ小集ヒいたる上ヲて其上首たる神ハ産靈神小生事
此又論無し故古事記小高御産業日神之子思兼神令
思と有ハ此神の令思たるあり然るを其記ハ此神之
命以而と云ざるハ記漏したるあり例を云ハ下文中

小召天兒屋命布力玉命云々令_レ占_レ麻_レ迦_レ那_レ波_レ而_レ有_レ
を思ふ可_レし此時高皇產靈神神皇產靈神も集坐けむ
事ハ論無きを殊_レ召_レて令_レせ給_レへる神ハ產靈神小坐
ずハ何れの神の御事トハ爲むと云れたる此_レハ甚
隈_レこそ所無くあむ聞元たりける然_レバ此_レハ會
市の上_レ高皇產靈尊乃_レあどの字有_レべ_レ所_レあ_レ思
ふ事_レあれども下_レ小思兼神を學給_レへる趣_レあ_レてハ
其大神の所置_レある事著明_レあれハ省_レれたる者あり古
事記も是_レ以_レ八百萬神於_レ天安之河原_レ神集_レ而_レ有_レて
訓集云_レ都度此_レと有_レハ其產靈神より始_レて諸神の己自
小聚_レひ給_レへる事を云_レるあり然_レハ八百萬神の集_レハれ
ハ自_レの事_レあれハ都度閑氏_レとハ云_レず_レ雖_レも次_レ高皇
產靈日神之子思_レ金神令_レ思_レ而_レ有_レる續_レき_レ萬事_レ絶_レ論
令_レせ給_レへる事其神_レと知_レる_レとあり此_レ等_レハ文_レを錯_レ綜_レ
へて其重_レ後_レを省_レる者_レあれ_レバ其_レを_レ知_レる_レ眼_レを_レ具_レへ_レず_レハ

有_レべ_レ事_レ共_レあり○問_レ之_レハ本_レ小登波志牟_レと有り其意を得
て登波志米給布_レと訓_レべきあり此_レハ正書_レ小計_レ其_レ可_レ禱
之_レ方_レと見_レ元古語拾遺_レ小議_レ奉_レ謝_レ之_レ方_レと有_レる其事_レを云
あり物を議_レる事を問_レと云_レハ天孫降臨_レ章_レ小故_レ高皇產
靈尊_レ召集_レ八十諸神_レ而_レ問_レ之_レ曰_レ云_レ故_レ高皇產靈尊_レ更_レ會
諸神_レ問_レ當_レ遣_レ者_レ云_レと見_レ元古事記同段_レ小_レ是_レ以_レ高御
產業日神天照太御神亦_レ問_レ諸神_レ等_レ云_レ故_レ亦_レ天照太御
神高御產業日神亦_レ問_レ諸神_レ等_レ云_レと有_レる何れも人
小物を問議_レる事を問_レと云_レ例_レあり借_レ此_レを登波志牟_レと
有_レハ即_レ右_レ小云_レる_レか如_レく產靈神の命令_レを以_レて令_レ問議

給へるが故あり古事記小思金神令思而集常世長鳴
鳥令鳴而略中料伊斯許理度賣命令作鏡料五祖命令作
八尺句璉之五百津之御須麻流之珠而召天兒屋命布
力玉命略令台合麻迦那波而略下有八更あり傳十九
百五十小引る古語拾遺小爰思兼神深思遠慮議曰と
七丁有て下小令其神造某ニと云事の數多見元たろハ其
事ハ思兼神の思慮小出たろ事ふてハ有れど諸神
を使令ひて其事を令せ給ふハ此塲小神集坐る神の
中小も其上首と御在し坐す高皇產靈神皇產靈二神
の令せて事を令成給へるふれバ右等の令字共小皆

其二神の御命ふる事灼然くふむ有ける然れバ此の
萬神を以て令議給へる者ありて思兼神小も令思給
へるあり下小思兼神云者乃思而白曰と有る照し應
せて曉る可○高皇產靈尊之息ハ諸本共小尊字を脱
せざる類史又良海本其ハ高皇產靈尊と有て正しけれバ今此
を補ふ者あり御紀小其御名の出たろ此を除てハ何
れ小も尊字有れバ中古小書漏せざる者あり唯顯宗天
皇三年御紀小日神月神の各託し給へる所小我祖高
皇產靈と云事二有りと雖も若槻某が畏庵隨筆小其
も二所ふが小高皇產靈尊と有りと云れバ其も今
本小の脱せざる小とるハ有けれ本より誤らざりつ

る事知るるこあり抑此大神ハ一も天地の初發の時
より御在り坐て此世中ハ更あり又世小在り有ゆる
萬の物をも事をも始させ御在り坐て尊一とも高一
とも世小譬一へ無き大神小御在り坐せバ御紀の文
法として至貴曰尊自餘曰命と有が如く書一別りれ
て何處も高皇產靈尊と書奉らせ給へるを如何小一
書ふればどて無禮ハ小尊字を離ちて高皇產靈ふど
ハ記し奉るよトき事ふれば必加へ奉る可き御事ふ
りハ其上類聚國史小尊字有りトハ云物の其も此
ハ非ハ御紀ハ取らせ給へる少て校意小補給へる
舊事紀ハ中古小出来れる者ふるが其も高皇產靈

△良海本ハハ子
鳥と見えたり

尊思兼神有思慮之智と息ハ美古と訓へ即古事記
有ハ此ハ取れるあり息ハ美古と訓へ即古事記
小ハ高皇御產巢日神之子思兼神と有る是あり猶此
外も舊事紀小高皇產靈尊兒天思兼命と見え異本
神系圖ふども右小同トと雖も其遠祖の事小係たり
小て實ハ其御息ハ御在り坐ず其思兼神と申す
ハ傳十九百七十小委六丁く論め云るが如く即天兒屋
命の御事小渡らせ給ひて其系記ハ神代本紀小津速
魂尊兒市千魂尊兒天兒屋命中臣連と見えたり是ふ
り然る小此小高皇產靈尊之息と有ハ上小己小云る
如く此一書小會八十萬神於天高市問之と有ハ其大

神武天皇御紀の櫛王
鏡速日命云三遠有兒
息名曰可美真子
命有子息息を
美古訓り絶体壹
元平御紀小遣神祇
伯等敬祭神祇求
天皇息允登民望と
有の息を美古と
訓たり

神の命令あり又古事記小然有思金神令思而と有
ふども其大神の科せ給ふ所あるが故小即其事共の
最前小在る神あれハ其事小率れて然ハ云傳ふる事
とも成れるある可一猶傳二十二
十興台産靈神の
傳小云てひとす御紀ハ多く御子と云ハ息字を書
賣ハ息男息女と云字を書るを和名抄子孫類ハ子息
也と見え禮記註小陽生日息と云ハ字彙ハ子吾所生
者故曰息
○思兼神云者ハ思兼神登云布迦微と訓る
其旨一延佳説ハ云者の云字ハ衍ふる可一訓點小云
字を傍小付たるを誤りて本文小書入たるある可一
神宮小傳へし古本又纂疏ふども云字無しと云り
長海本ハ然有

公次あり第テ一書ハ
鏡作部遠祖天糠戸
云者ト忌部遠祖
太玉云者ト玉作
部遠祖豊玉者ト
山雷者ト野槌者
ト有ハ更なり

然る公大孫海宮遊行章第二一書小從天降者當有天
垢從地來者當有地垢實是妙美之虚空房者歟と有る
者歟字此と同トく云神と訓べき所あるハ云字無れ
バ其説信ふ云れたるが如しと雖も又訓の任小書れ
たる例も猶外小見ゆれば容易く削る可うとざるか
り其事傳亦行此言の例ハ御門祭詞小天能麻我都比登云神云二
と見え大祓詞小ハ瀬織津比咩云神と速開都比
咩云神と氣吹戸主云神と速佐須良比咩云
云神とも有て古言小多き事あり又紀記ハ更ハ云
ても漢文体小者字を書るハ云二登云神と云
又ハ云二登云人トハ言を加へて訓む事常あり○思

慮ハ意母比多波加流訓事常此此在正書小深
思謀遠慮と有り古語拾遺小深思遠慮と有り此思慮の
語を伸たる者のして其事のの甚じき事を云むと
て深遠の語を添たるのてるハ有けれ共小言以て行
く時ハ思慮の二字小過ぎる者あり此事傳十九百八
丁小己小註せりき思ハ思兼神と申す神名の思是是
り慮字ハ天孫降臨章第一一書小然慮有殘賊強暴横
惡之神者又古事記の其段小天若日子の事を慮獲其
国と有ふとハ此小居て彼處の狀を測り今より後の
事を圖れるあれば此一字小ても意母比波加流理と

訓べき所ある小て常のも然云ふ所あるあり借此波
加流の言ハ正書小計其可禱之方拾遺小議奉謝之方
おと有る計小議小此小同じく又神武天皇御紀小乃
運アモキカウラ神策於冲衿と見元又猶字迷マユ圖コトヲ無復改意おと有
神策迷圖共小波加理許登と云る小歌を謀る為る事
を設るふれバ其も同言あり又綏靖天皇御紀小圖害
二弟子と有る古事記小ハ將殺其三弟謀之おと有
て字ハ種ニ小異れども本ハ波加流と云一言小出た
るガ其ハ傳十九小云るガ如く物を量る度量の量小
同トク其類ち者りけり規矩を用ひて其度ハドを定むる謂の語ありけり

然れば此の思兼神の思慮ハ云ニの謀を成す内ハ此物捧を奉らば日神の御心大のや叶ハせ給ふ可うむ其事を仕奉らば日神の大御心や和ませ給ふ可うむむと其惑けさせ給ふ可き方を思慮り定むるハ在る事あり唯ハ心當ハ推度ハ物爲る事ハ當るも有り又當らざるも有て實ハ信難るを思兼神のハ此時始て彼御天降の度ハ至る所ハ少くも違ふ事無く其未の未まで行通りて悉ニ圖る所の如くふるハ實ハ天御量以て○智ハ佐登理と訓り佐登物の度の量るが如くふる○流の用言を体言と成したるふるが自得るを佐登流と云ハ人ハ令得るを佐登須と云ハ其我も人も得たる状ふるを佐登志と云ハ聰明サトシと云る是ハり借此

六千十四

佐ハ傳千五セナ小云るが如く性を佐賀と云ハ真心マコの義ふるが其佐賀ハ八洲起元章ニ小祥を佐賀那志と訓るハ祥を佐賀と云ハ又あり此を以て佐賀の佐ハ福祥サキの義有を知て此を廣く群言ハ考るハ海官宮遊行章ハ兄火闌降命自有海幸弟彦火ニ出見尊自有山幸と有て其第一一書ハ兄火酢苜命能得海幸弟彦火々出見尊能有山幸と有て自有能得得と云るハ其第一一書ハ兄火酢苜命能得海幸故號海幸弟彦火ニ出見尊能得山幸故號山幸と有て此ハ其自能得る物小就て其幸彦と云名御在ハ坐小至れり其を

○日本書紀傳二十

〇三七

古事記の故火照命者爲海佐知毘古而取諸廣物
獲物火遠理命者爲山佐知毘古而取毛鹿物毛柔物
有て此の其佐知小取と云語有を彼第六一書小佐
知小利字幸字を連ハ訓せたる小此同卜事を常陸
風土記多珂郡條能甲村古老曰倭武天皇爲巡東垂領宿此
野有人奏曰野上群鹿無數甚多其得角如蘆枯之原比
其吹氣似朝霧之立又海有鰻魚火如八尺并諸種珍味
遊鯉口多者於是天皇幸野遣橘皇后臨海令漁相競捕
獲之利別授山海之物此時野狩者終日馳射不得一院
海漁者須臾才採盡得百味焉獵漁已畢奉羞御膳時勅

皇傳三十四
下幸魂奇魂
の下山云と見

信從曰今日之遊朕與家后各就野海同爭祥福俗語曰
野物雖不得而海味盡飽喫者後代追跡名飽田村と有
も海山小就て獲物を争給ふへるふり祥福と書て俗
語曰佐知と有山上の山幸山幸小同卜借此小右の證
共を擧るハ佐知の佐ハ祥サキの義小して各其人小依て
皇祖天神の授依し給へる賜物を云ふり性を佐賀と
云も皇祖天神の授依し給へる賜物小て我小性質た
る真心と云義あり俗右等ハ小云ふ幸福と云小ハ非ず身小
受け心小得て其得る所有を佐賀と云ひ佐賀と云々
ふれば其佐ハ即神の御靈を云称ふりけり然れば物を
授と云

此を伸て佐知云ハ
幸立の義あり佐使
波布云ハ幸鏡の
義にて鏡ハ研鏡の
小同ト

も幸を人小附る意あり賢を佐加斯と云も幸の可畏
きを云あり其外小も佐某と云ふ佐多くハ幸の意小
して合り但幸ハ物小局りて有る物小して廣く遠く
行直る物小るがれバ佐小又本小の狭かふる義有
る事云も更ふ斯れバ佐登流ハ幸取の義小して其幸
て事ありし
を得て能く救育と成すを云あり此神をハ意思兼神
と申すも傳十九百七十四丁 小云るが如く万葉十三十六
小物部乃八十乃心叫天地二念足橋と云る狀小て八
百萬千萬神の心ニふる智を小合せ兼給へる心の御
名ふるを思不可きふり佐登流の例ハ應神天皇十六
年御紀小玉仁來之則太子菟道稚郎子師之習諸典籍
於玉仁莫不通達之達字を佐登流と訓るを履仲天皇

△續後紀十九
詔小悟開妙云
こと云事小見
え

△古事記序に即覺
夢而敬神祇所以
稱賢起用明天皇
元年御紀小厥戸
皇子の事と生而
能言有聖智云
兼悉達矣と云
有り

四年御紀に於諸國置國史記言事達イヌ四方志と有るハ
達を致と訓る其ハ往足ニキタルの義ふれバ智サトルの至極と云ふ
り續紀第一詔に故如此之狀乎聞食悟而云ハ万葉四
十 小不念乎思常云者天地之神祇毛知寒邑禮左變
ふと多き語あり其反語ふるハ古事記朝倉宮段に奴
有者隨奴不覺而過作甚長とも見ゆ此佐登流ハ
を覚をも解をも哲をも識をも訓又老子ハ智慧
と云字の有を常小用ふる事あり翻譯名義集に決定
審理謂之智造心分別謂之慧と見えたり通證小ト氏
曰智去取之義善惡分別是智徳也と云ハ右小似た
る説あり名義枚に智字佐登流とも又佐登須ハ人を
佐登志又佐加志又登志又登毛と有り
一て智サトルる令るあり古事記白檮原宮段に於是亦高木

大神之命以覺白之略中故隨其教覺云、玉垣宮段の覺
于御夢曰略中如此覺時布斗摩迹の占相而求何神之心
訶志比宮段の於是太后歸言教覺詔者西方有國略中亦
建内宿祢居於汝庭請神之命於是教覺之狀具如先の
略故備如教覺ふと有ハ此の謂ゆの神託の類よて風
神祭詞の皇御孫命詔云、誰神曾天下乃公民乃作
作物乎不成傷神等波我御心止悟奉礼宇氣比賜支是
以皇御孫命大御夢尔悟奉云、我御名者天乃御柱
乃命國乃御柱乃命止御名者悟奉云、是以皇神乃
辞教悟奉處仁宮柱定奉云、遣唐使時奉幣詞の皇

神命以白船居波吾佐止年教悟支比教悟給比那我良船居
作給波部礼云、ふと有の是のふり神武天皇御紀の兄磯
城點賊也且先遣弟磯城曉喻之并説兄倉下弟倉下と
も有の佐登志須ハ我方の得を佐登流と云ふ又よて人
は得知めて其意を令得をと然言ふ語の者のふり其
端のと云時ハ我の事のふりと端すと云ハ人と然為
しむ事の成ハ同ト戻の戻す至ハ至す見ハ見すの
類と合せ考へて又其智有の状の云ハ佐登志と云語
知らる事ふり有り崇神天皇十年御紀の倭迹ハ四百襲姫命聰明敷
而聰明敷智貌容壯麗仁賢天皇御紀の幼聰穎才敏多

今古事記序の
釋由阿礼の事と爲
入聰明度目誦口
拂耳勤心と有る
共は同じ意あり
言ふ

識然而仁惠謙怒温慈と見えたる聰明又ハ聰字を佐
登志と訓る是あり古事記池邊宮段の上宮之豊聰耳
命を御紀ハ既戸皇子更名耳聰聖徳或名豊聰耳法
大王と見え又既戸豊聰耳皇子と有る豊聰耳の豊ハ大あり称辞よして聰耳
ハ其元年御紀ハ其皇子の事を生而能言有聖智及壯
一聞十人許以勿失能辨兼知未然と有る意の如き却
名あり万葉十二ハ大夫之聰神毛今者無と有る
佐登志ハ其聰敏は状と云て本ハ智の佐登理出でと起り
其佐ハ幸の義よして天神の稟賦給へる御靈の謂よ
起れる言ふ者あり
又神武天皇御紀ハ天皇生而明
達と有る明達を佐加志と訓る

又賢愚の賢字を佐加志ふと云ふ佐も亦右の智又ハ
喻又ハ聰明の佐の義と異ふとすして其本同言あり
者あり○乃思而白曰ハ古事記ハ高脚産巢の神之子思
金神令思而云ハ其却天降段より尔高脚産巢の神天
照太御神之命以略思金神令思而詔云と有る其ハ
一先思兼神の令思て其謀慮を取て令せ給ふ所あり
が故ありと此ハ右ハ會八十萬神於天高市而問之と
と有る其却答ハ思兼神の思慮給へる所を申せる所
ふれば唯其思ふ所を述るのみあり故ハ乃思而白曰
とハ有る故右と同じ所を此の天孫降臨章第一一
書ハ故天照太神乃召思兼神問其不来之状時思兼

△古語拾遺は於思
從思兼神謀令石
凝鏡神鏡の像之
鏡と有る如く

△下は用此奉造
之神と有る神字
と美加多訓と
此は相應と有る
事とす

神思而告曰且且遣雉問之於是從彼神謀乃使雉往候
之と有て天神の命令に依て思兼神の思慮の所を申
せしを天神の取て行給ふ所は從彼神謀と有て文
義甚能知るしを古事記に其思兼神の令給へる事
を省れたる故に思兼神令思而詔とハ云る者ありけ
り然れハ此よても乃思而白曰ハ其思兼神の謀の所
を云ひ下は其を兼て故即云いと有る彼神の謀の
從ひて其を執用ひ令行り給へり又此は問之と有る甚
の上ハ八十萬神を會へと有る又此は問之と有る甚
二分明く有て必其上首と御在り坐す ○彼神之象
高皇產靈尊の命令に依る事灼き者あり
ハ四神之象と云ひが如し△古語拾遺は日像之鏡と有
る是より保此の尋常は云ふ人像ふどの如く日神の

△其御鏡小移り給ふ
已事の大御身の
御形の二ハ非ず
其天地の内小照徹
せ給ふ

頭御身を圖造るハ有べり其光華明彩く御
在し坐て六合の内小照徹せし形容を摸模奉れり
あり其ハ古事記小尔天宇受賣白言益汝命而貴神坐
故歡喜咲樂略指出其鏡示奉天照太御神之時天照太
御神逾思奇而稍自戸出而臨坐之略下と有る信其御
光の状も何し甚能相似たりけむ事傳十九二百七八
咫鏡の下小註ソが如し又其四百六小引る古語拾遺
小尔乃太玉命以廣厚称詞啓曰吾之所捧寶鏡明麗恰
如汝命乞開戸而御覽焉と有る見紛ふ計り日神の御
形状小似せ奉れりふが如汝命と申せりハ其頭御

〇桓武天皇御紀和
 清原御傳ふり宇
 佐大神の神を
 給ふ所小神即
 現形其長三丈許
 色如滿月清麻
 魂夫度不能仰見
 と有る御有状の如
 く仰見奉るヲハ
 日神ハ唯御光の
 三ふるが如く圓三
 と所見とせ給へま
 り其
 マリ又記傳ハ卷小
 日影を爲たるも
 此影曼を頭を
 小ハ日光の照り
 指隔つる料あり
 と云れたる
 〇日神の頭御身ふ
 ぶハ二り有め

身の像ハ非ず其明麗ハ一き状を譬へ申せり
 允てハ其ハ忍鏡の中臺圓形なるハ天日の象ありハ
 頭花崎ハ其光の形あり此を以て彼神之象とも日像
 之鏡とも申奉る事ふむ有ける又拾遺ハ日御網の
 是日景之像也と有ふども網を引延へたる状を天日
 小象どり其端の出たるを以て光耀小形とれるふど
 皆一ふ諸如此く物小象とれる事ハ甚く後世の状小
 と聞ゆれども然れず此小物寶を置居て其神靈を招
 寄る事ハ即思兼神の思慮小出て世小御靈寶を定め
 て神靈を持齋き仕奉る事の始ふむ有ける此ハ逆
 状なる小依て其事ハ成るざりけれども宗神天皇十

年御紀ハ吾聞武埴安彦之妻吾田媛密來之取倭香山
 土表領中頭祈曰是倭国之物寶則及之物寶此云
 也香山の土を以て倭国の物寶と云て望能志
 をしし国土小象りて国を奪取む謀を成しけるふ
 り又高橋氏文小景行天皇御世小般石鹿六雁命の膳仕
 奉りれし所ハ是時上總国安房大神子御食都神止坐
 奉天若湯坐連等始祖意富賣布連字令火鑽天此字忌
 火止爲天伊波比由麻閉天供御食并大八洲天像天八
 半止古八半止咩定天神齋大嘗等仁供奉始支と云事
 の有て此より始れる例と見えて神今食儀大嘗祭儀

